

指導所だより

コガネムシ類の防除にあたって

最近、林業用苗畑でコガネムシ類による被害が増えている。そこで薬剤散布を行い被害を軽減させることも必要であるが、発生源のうちで排除可能なものは努めて除くことが、さらに重要である。

1 発生源の除去

(1) 据置き苗（ヒノキ・イチイ・クリ・サクラ・ヤナギ・シラカンバ・ハンノキ・ツツジ類等）および芝草・大豆はコガネムシ類の増殖場所となるので、注意すること。

(2) 苗畑は果樹園から離すこと。

(3) 未熟の堆肥はコガネムシ類の産卵をうながすので、努めて完熟堆肥を用いるとともに、堆肥の切りかえしの際には必要に応じて薬剤の混入をすること。

(4) コガネムシ類の幼虫は、気温の低下にともない地中深く潜入し越冬するので、苗木を掘りとったのち、できるだけ早く床面をトラクターで耕耘し、地中に潜む幼虫を殺傷すること。このさいEDBおよびD-D等の土壤燻蒸剤を併用すると効果的である。

(5) 連作は避けること。大根・ニンジン・ナガイモ・バレイショ等はコガネムシが寄生しにくいので輪作物として好適である。

2 成虫の防除

コガネムシ成虫は、土中で羽化し地表に脱出したのちに交尾を行い、産卵をする。産卵が行われる場所はヒノキおよびカラマツ等の苗畑であるので、その発生初期に防除することが、とくに大切である。

防除薬剤としてはスミチオン・ディプテックス等の粉剤が有効である。またコガネムシ類は飛翔力が強いので、個々の苗木生産者がバラバラに

行ったのでは、地域での密度を低下させることはなかなか困難である。したがって、防除にあたっては、地域ぐるみ広域的に行うことが大切である。

コガネムシ類の一種であるナガチャコガネは6月上旬ごろから現われはじめ、その最盛期は7月上～中旬である。本種は日没後およそ1～2時間に限って、地上に出て盛んに活動し、再び土に潜って産卵する習性がある。この行動は産卵期間中くり返される。したがって薬剤散布を行う時刻は夕方がよく、また第1回散布は6月10日前後とし、最終回を7月下旬とする。散布回数は2週間おきに行って3～4回が必要である。

3 幼虫の防除

幼虫は土中に生息し苗木の根を食害し被害を与えるので、薬剤は常に土壌と混和し、幼虫が薬剤と接触できるようにしなければならない。しかし幼虫が生息する土中での深さは春と夏で異なるので防除の際は、次の点に留意する。

(1) 春の防除

床作りに加えて土壌中にすき込む薬剤は、分解の早いダイアジノンよりも残効の比較的長いバイジット（剤型は微粒剤または粉剤、使用量10a当たり9kg）を用いることが適切である。またEDBおよびD-Dの施用も有効である。

(2) 夏の防除

この時期の苗畑は高温になり、しかも乾燥するため、施用した薬剤は短期間にガス化して消失する。この傾向はとくにダイアジノンで認められる。

ダイアジノンまたはバイジット乳剤1000倍液の多量散布（1.5ℓ/m²）を行うことが望ましい。

また散布にあたっては、動力散布機を用い、ノズルを取りはずして行うと能率的である。